無用の用　解答

A　語句の意味と読み

(1) あなた。（相手を敬って呼ぶ言い方） ／★「こ（子ども）」ではない。「孔子」「荘子」の「子（先生）」と同じく男子を敬って言う字で、目の前の相手に使うと「あなた」になる

(2) いっしょに・ともに。 ／★「与」は「AとB」の「と」、「あたふ（与える）」、「くみす（味方する）」、文末の「か・や」など、読みと働きの多い字。ここは下の「言ふ」にかかる「ともに」

(3) そもそも・いったい。（文の初めに置いて、話を起こす語） ／★文頭の「夫れ」は話を起こす語。文末に置かれた「夫」は「かな」と読んで詠嘆を表すので区別する

(4) 掘る・掘り下げる。 ／昔の中国の注釈にも「塾は掘なり（塾は掘るという意味だ）」とある。足もと以外の土地を深く掘ってしまうこと

(5) こうせん／地の底（地下の深いところ）。 ／★歴史的仮名遣いの「くわう」は現代仮名遣いでは「こう」（「光」「広」も同じ）。死者の行く世界（あの世）の意味でも使われるが、ここは掘った穴が届く「地の底」

(6) ～もまた。 ／★同じ「また」でも、「又」は「そのうえ」、「復」は「ふたたび」。「亦」は「～も同じように」。白文の文末の「矣」は読まない置き字

B　句法

(7) 読まない置き字として扱い、直前の「知り」に送り仮名「て」をつけて表している。働きは順接で、「～して、そうして」と前後をつなぐ。 ／★「而」は順接にも逆接にもなる字。ここは「無用がわかって、そうしてはじめて」と自然につながるので順接

(8) 可／可能（～できる）の意。「与に用を言ふべし」＝いっしょに有用について語ることができる。 ／「可」は「べし」と読み、可能のほか「～してよい（許可）」などの意味にもなる。文末の「矣」は読まない置き字で、言い切りの語気を強める

(9) 二重否定。「広くて大きくないわけではない」＝じつに広くて大きい（強い肯定）。 ／★「不」が「広且大」を打ち消し、「非」がそれをさらに打ち消す。「且」はここでは「かつ（そのうえ）」と一度だけ読む語で、再読文字の「且（まさ）に～んとす」ではない

(10) 耳／限定（～だけだ）。 ／★文末で同じく「のみ」と読む字に「已」「爾」「而已」「而已矣」がある。「足を容るるのみ」＝足をのせる所だけだ

(11) それならば・そうであるならば。 ／★白文は「然則」。前の話や相手の答えを受けて、「そうだとすると」と次へ進める言い方。本文では、荘子の最後の言葉の初めにもう一度使われている

(12) 乎／反語。「～だろうか、いや～ない」の意。（人はそれでもなお、その土地を役に立つと思うだろうか、いや思わない） ／★未然形に「んや」をつけて読むのは反語の読み方。ただし、恵子が「無用なり」と答えているので、相手に答えを求める疑問（～だろうか）として訳す本もある。お使いの教科書に合わせること

(13) 「為る」は「たる」と読み、断定（～である）の意。「也」は「や」と読み、「～ということは」と話題を取り立てて示す。 ／★「為」は「なす・なる・たり・ため」や受身の「る・らる」など、読みの多い字。「無用の用為るや」＝無用が（じつは）用であるということは

C　話し手・指す内容

(14) 恵子が荘子に言った言葉。「子」＝荘子。 ／★冒頭の「恵子荘子に謂ひて曰はく」で、話し手と相手がわかる。恵子は、荘子と理屈をたたかわせる議論の相手として『荘子』にたびたび登場する

(15) 大地のうち、足をのせている所を除いた、まわりの土地。 ／「足を廁りて（足をのせる所だけをはかって残し）」に続くので、掘るのは足もと以外の土地

(16) まわりを掘られて、足をのせる分だけが残った足もとの土地。 ／★⑥で、人が実際に「用ゐる所（使っている所）」として挙げた、足をのせる所のこと

(17) 恵子。まわりを黄泉まで掘られて、足をのせる分だけが残った土地は、もう役に立たないということ。 ／★①で恵子が「無用」と言ったのは荘子の言葉のこと。同じ「無用」でも、ここで指すものはちがう

D　口語訳

(18) 無用（役に立たないということ）がわかって、そうしてはじめて、いっしょに有用（役に立つということ）について語ることができる。 ／「始めて」＝そうなってはじめて。「べし（可）」＝～できる

(19) そもそも大地は、広くて大きくないわけではない（＝じつに広く大きい）が、人が（実際に）使っているのは、足をのせる（だけの）所にすぎない。 ／二重否定「非不」と限定「耳（のみ）」を訳に出す。「～ざるに非ざるも」の「も」は「～けれども」

(20) それならば、足をのせる所だけを残して、そのまわりを掘り下げ、黄泉（地の底）まで届かせたとしたら、人はそれでもなお（その足もとの土地を）役に立つと思うだろうか、いや、思わないだろう。 ／★「致さば」は未然形＋「ば」で仮定（～したならば）。「尚ほ」＝それでもなお。※反語でなく疑問（～だろうか）として訳す教科書もある

(21) それならば、無用（に見えるもの）が、じつは有用である（役に立っている）ということも、またはっきりしている。

無用の用　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 人が実際に足をのせて使っている、足の大きさ分の土地だけが「有用」で、それ以外の広い大地は使われていないので「無用」に見える、ということ。

(23) 恵子は、まわりの土地がなくなれば足もとの土地も役に立たないと、自分で認めたことになる。そのため、使われていない（無用に見える）土地こそが足もとの土地の役立ち（有用）を支えている、という荘子の結論を受け入れるしかなくなった。 ／荘子は自分で答えを言わず、問いかけて相手に答えさせている

(24) 使わない土地が足もとを支えるように、役に立たないものが有用を支えるという考え。(三十九字)

(25) 役に立たないと見えるものにも、役に立つものを支える大切な働きがあることを、恵子自身に認めさせた。だから、荘子の言葉が世の中の役に立たない（無用だ）と言われても、それで値うちがないことにはならない、という切り返しになっている。 ／「無用」と言われたことを、そのまま「無用の用」の話ではね返している

F　出典・思想

(26) 外物篇（がいぶつへん）／道家（老子とあわせて「老荘思想」とも呼ぶ）。 ／書名の『荘子』は「そうじ」とも読む。外物篇は『荘子』の雑篇の一つ。議論の相手の恵子（恵施）は、ことばの論理を重んじた名家の思想家に数えられる

(27) 人はみな、役に立つものが役に立つことは知っているが、役に立たないものが役に立つことを知る者はいない。／本文では、足をのせていないまわりの土地が、足もとの土地を支えて役立たせていること。 ／★「莫し」＝〜する者はない。「而」はここでは逆接（〜けれども）。「知りて」と読む本もあるが、意味は同じく「〜けれども」。この一文の直前では、食べられる桂の木は伐られ、使える漆の木は切りつけられる、と述べている

(28) 人間の小さなものさしで「役に立つ・立たない」を決めつけることを批判し、役に立たないと見えるもの（無用）にこそ大切な働きがあると説いて、世間の「有用」を重んじる考え方をひっくり返している。 ／道家は、人の手をよけいに加えず自然のままにまかせる「無為自然」を説いた。「役に立とう」とすること自体を問い直すのが荘子の発想

【現代語訳（全文）】

恵子が荘子に向かって言った、「あなたの言うことは役に立たない（無用だ）。」と。

荘子は言った、「無用（役に立たないということ）がわかって、そうしてはじめて、いっしょに有用（役に立つということ）について語ることができるのだ。そもそも大地は、広くて大きくないわけではない（＝じつに広く大きい）が、人が（実際に）使っているのは、足をのせる（だけの）所にすぎない。それならば、足をのせる所だけを残して、そのまわりを掘り下げ、黄泉（地の底）まで届かせたとしたら、人はそれでもなお、その（足もとの）土地を役に立つと思うだろうか、いや、思わないだろう。」と。

恵子は言った、「役に立たない。」と。

荘子は言った、「それならば、無用（に見えるもの）が、じつは有用である（役に立っている）ということも、またはっきりしている。」と。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる